



TITLE:

京大広報 No. 457

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 457. 京大広報 1993, 457: 637-644

ISSUE DATE:

1993-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209180>

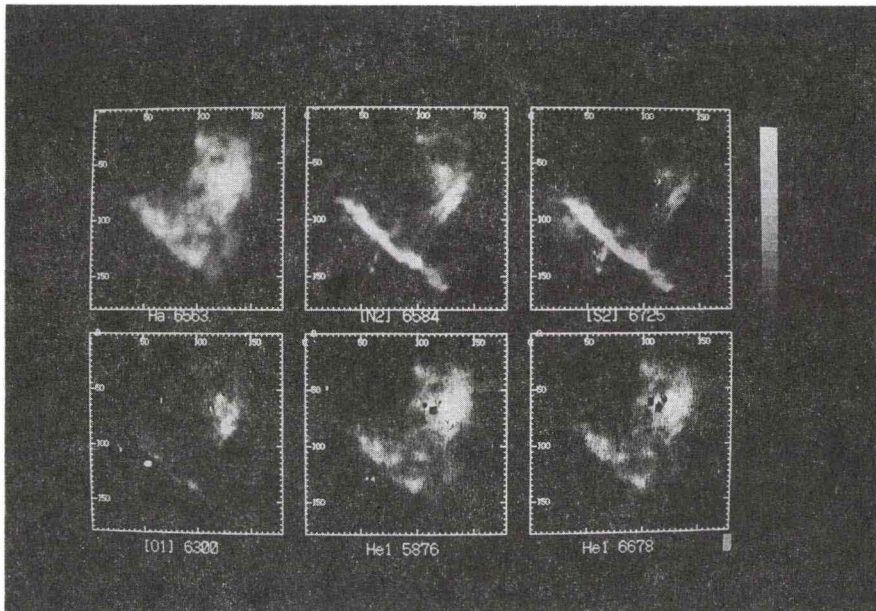
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 457

京都大学広報委員会



オリオン座大星雲 ー関連記事本文 639 ページー

上段左から、水素、窒素、硫黄のイオンの光。
下段左は、酸素イオン、他の二つはともにヘリウムイオンの光
であるが波長がことなる。

目 次

平成6年度大学入学者選抜	「白馬山の家」の冬季開設..... 642
大学入試センター試験の実施..... 638	<随想>
<部局の動き>	大学づくり雑感
総合人間学部創設記念シンポジウム	名誉教授 坂本 慶一..... 643
及び記念式典・祝賀会..... 638	<コラム>
農学部創立70周年記念式典・祝賀会..... 639	追憶のなかの海
<紹介>	西村 三郎..... 644
理学部宇宙物理学教室大宇陀観測所..... 639	京都大学の将来構想について
計 報..... 641	(別冊)..... 645

平成6年度大学入学者選抜 大学入試センター試験の実施

平成6年度大学入学者選抜大学入試センター試験は、平成6年1月15日（土）及び16日（日）の両日に実施される。

このため本学では、1月14日（金）の授業が休止される。

試験の概要は次のとおりである。

1. 期日及び試験科目

1月15日（土）

外国語，数学（A），数学（B），理科（A）

1月16日（日）

理科（B），国語，社会，理科（C）

2. 試験場及び志願者数

北部・総合人間学部・本部・南部の各構内及び
関西文理学院

合計 8,796人

<部局の動き>

総合人間学部創設記念シンポジウム 及び記念式典・祝賀会

11月14日（日）午後1時30分から4時30分まで、法経第一教室において総合人間学部の創設記念のシンポジウムが開催された。そのテーマは「総合と創造—21世紀への視点：民族と文明」で、新しい学部の創設の理念である総合を踏まえ

て、新学部の教官によるシンポジウムとして企画された。発題者は国際文化学科の2名の教授が担当、まず佐伯啓思教授が「新しい理念をめぐって—現代社会の価値観」という題で、フランシス・フクヤマの『歴史の終わり』等を取り上げて現代思想の動向について述べ、ついで福井勝義教授が「エスノシステム（民族系）のとらえ方—民族間の戦いと共生の戦略」と題して、現在各地で起きている民族問題の基礎にある民族相互関係の分析を基に問題を提起した。それに対して、人間学科の嶋原眞一教授と村形明子教授、国際文化学科のエンゲルベルト・ヨリッセン助教授と自然環境学科の尾里建二郎教授がそれぞれ指定討論者として発言し、発題者との応答があった。また出席の来賓の中から京都精華大学の柴谷篤弘学長が発言された。司会は国際文化学科の米山俊直教授。

その後会場を都ホテルに移して、午後5時30分から創設記念式典と祝賀会が開催された。記念式典では、井村裕夫総長の挨拶、遠山敦子文部省高等教育局長（代理 工藤智規大学課長）、沢田敏男元総長、西島安則前総長の3人の来賓祝辞があり、祝電披露の後、児嶋眞平学部長の学部紹介と挨拶があつて閉会した。ただちに祝賀会に移り、岡本道雄元総長の乾杯発声に続いて大崎 仁日本学術振興会理事長及び佐藤禎一文部省学術国際局長の来賓祝辞、続いて足利健亮大学院人間・環境学研究科長のお祝いの言葉があった。シンポジウムには約200名、記念式典・祝賀会には約300名の参加があり、午後8時散会した。

（総合人間学部）



農学部創立70周年記念式典・祝賀会

本年に、創立70周年を迎えた農学部は、11月20日（土）午後3時から、都ホテルにおいて記念式典を催した。

式典では、初めに久馬農学部長が挨拶を行い、赤松良子文部大臣（代理 本間政雄専門教育課長）、井村裕夫京都大学総長、鈴木昭憲東京大学農学部長の祝辞があり、つづいて「農学の将来」を共通のテーマとして、沢田敏男日本学術振興会会長・元京都大学総長による「次世代人材の育成」並びに岩井 保近畿大学教授・前農学部長に



よる「深化の潮流」と題する記念講演が行われた。

式典終了後、祝賀会にうつり、沢田敏男日本学術振興会会長、外山三郎同窓生代表（昭和10年卒業・元宮崎大学学長）の祝辞の後、「鏡開き」が行われ、奥田 東国際高等研究所理事長の発声で乾杯、全国各地から出席した同窓生及び関係者等約400名が和やかに歓談し、創立70周年を祝った。

なお、この日、佐藤禎一文部省学術国際局長、高橋信孝日本農学会長、水谷純也北海道大学農学部長ほか多くの方から祝電が寄せられた。

（農学部）



＜紹介＞

理学部宇宙物理学教室 大宇陀観測所

大宇陀観測所は理学部宇宙物理学教室の天体観測施設である。図1は、ここで観測された渦巻銀河 NGC1068 の姿である。渦巻状の銀河本体を取り巻く淡いリングが、画面の両端いっぱいまで広がっている。この観測から、この銀河にはこれまで知られていた以上に広い範囲にわたって無数の微かな星が分布していることが分かった。

銀河を構成する物質の総量は、銀河の力学的性質から予想される。しかし、現在のところ、観測によって直接検出されている物質の量は予想値の半分にも足りない。残りの大半の物質が何処にどのような形態で存在しているのかを突き止めることは現在の天文学のもっとも主要な課題の一つである。このため、銀河の周辺を非常に微かな明るさ

まで観測をすることが重要なのである。

このような銀河の撮像観測を一つの目的として作られた大宇陀観測所望遠鏡には、わが国では唯一のリッチクレチアン式という光学系が採用されている。この形式の光学系は、主鏡、副鏡及び焦点の直前に置かれた収差補正レンズからなり、広い視野にわたって輝度の明るい像が得られる。リッチクレチアン式光学系の製作には、高度の光学技術が要求されるが、特に、大宇陀観測所の望遠鏡は、特殊な補正レンズを用いることにより、複雑な構造をした高性能の CCD カメラを焦点に取り付けることに成功した。これは世界的にもユニークな光学系で、宇宙物理学教室と（株）五藤光学研究所との共同研究によって開発されたものである。これによって、主鏡口径が60cmという小型望遠鏡でも、銀河の非常に微かな部分まで撮影できるようになった。

撮像観測とともに、分光観測は天体観測の基本

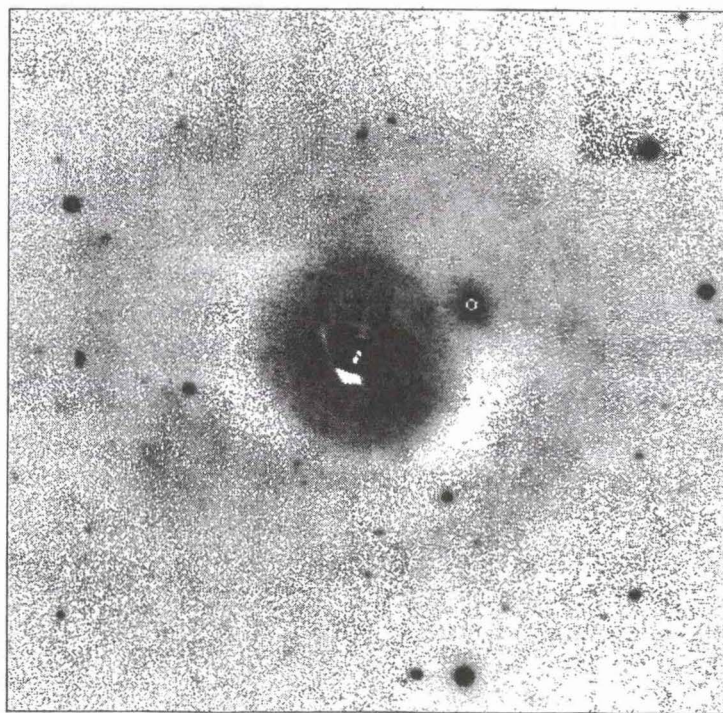


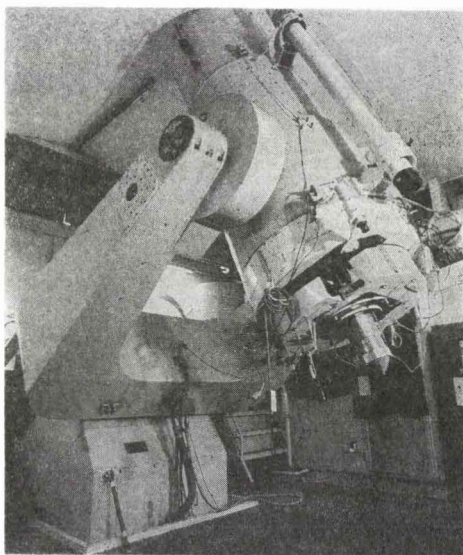
図1 渦巻銀河 NGC1068 のまわりに広がる微かなリング。(図は陰画で、黒みが濃いほど実際には明るい。)

である。分光観測によって天体のスペクトルが得られる。スペクトルとは波長別の光の強度分布のことで、これを分析すると天体の温度、密度、組成あるいは運動状態などの物理的な内容が分かる。スペクトルは望遠鏡に分光器を取り付けて得られるが、星雲や銀河のように広がりのある天体の全面にわたるスペクトルを得ることは容易なことではない。

大宇陀観測所では、天体の全面の各部分のスペクトルを自動的に観測するためのスペクトロネビュラグラフという特別の観測システムを開発した。このシステムによって、一つの天体の空間方向2次元、波長方向1次元、合計3次元のスペクトルが得られ、これからデータ処理によって、波長別の天体像が抽出できる。表紙写真は、スペクトロネビュラグラフによって得られたオリオン座大星雲の観測結果で、各種のイオンが発する光の波長別の像である。イオンによって、星雲の形が様々に異なっているのがよくわかる。

星雲や鉄河の観測ばかりでなく、星の観測も大宇陀観測所では行われている。最近のトピックス

は、今年の3月末に出現した超新星の観測である。稀にみる見かけの明るい超新星の出現であったので、光度が下がってしまうまでの3カ月間に



大宇陀観測所望遠鏡

60 cm リッチイレチアン式望遠鏡と、高性能 CCD カメラ (鏡筒の後端)。

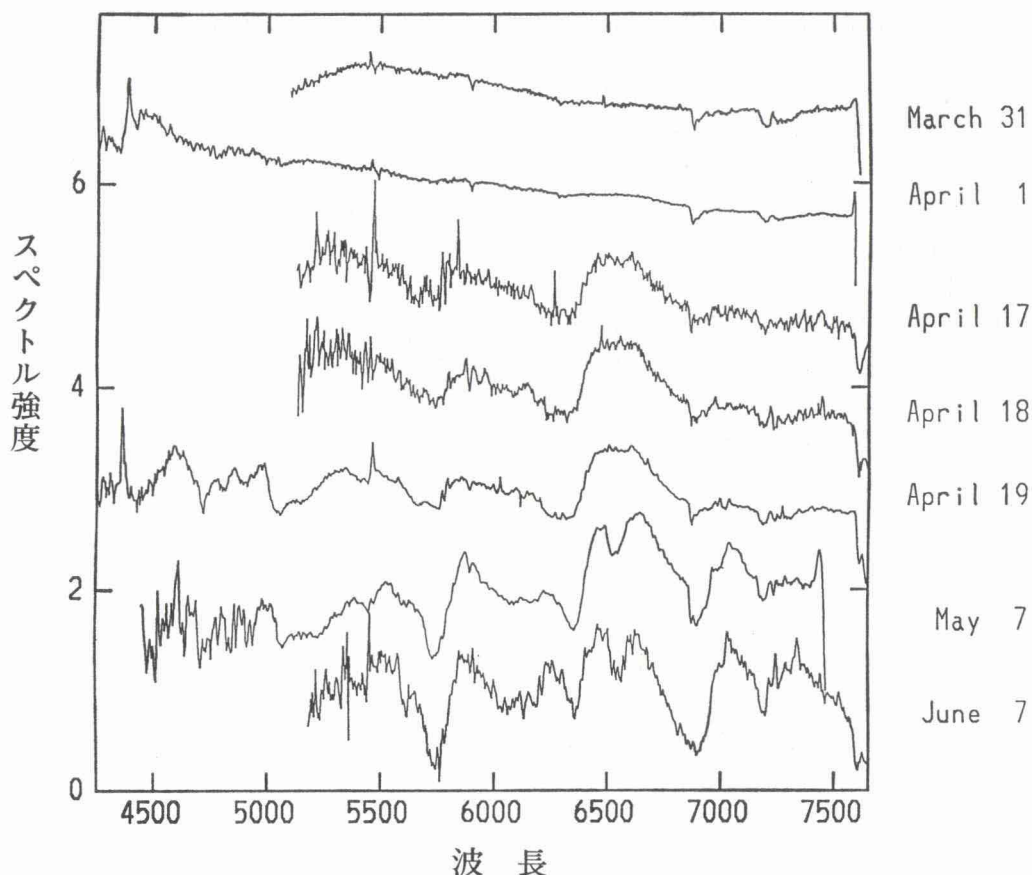


図2 超新星1993Jのスペクトルの時間変化。はじめは連続スペクトルであったが、次第に輝線や吸収線スペクトルが成長してきた。

わたってスペクトルの変化を追跡し、これによって、星爆発による元素生成のプロセスを解明する貴重なデータを得た(図2)。もう一つのトピックスは、あるX線星の変光の検出である。この変光の特徴は、ブラックホールの周囲を星が公転している可能性を示すので、ひきつづき詳しい観測が必要となっている。

大宇陀観測所は1977年にシュミット望遠鏡による観測所として開設されたが、1988年に望遠鏡をリッチクレチアン式に改造し銀河観測を開始した。上に述べたように、ここは観測と開発の場である。わが国がハワイに建設中の巨大な「すばる望遠鏡」(口径8メートル)に用いる装置の基礎開発も進められている。宇宙物理学教室の教官・院生ばかりでなく、ときには他大学や、海外からの利用もある。また、学部の学生の実習や卒業研究の場ともなっている。観測所は奈良県中部の「がしろひのたつみえて」の大宇陀の里にあり、

常駐職員もいないつつましい施設であるが、そこでの自炊と雑魚寝の生活から、新しい宇宙が広がり、若い天文学者が育ってゆく。

(理学部)

計 報

高 田 利 夫 名誉教授

本学名誉教授 高田利夫 先生は、10月28日逝去された。享年71。

先生は昭和21年京都帝国大学理学部化学科を卒業、理学部副手、助手、助教授を歴任の後、同38年10月化学研究所教授に就任され、磁性体研究部門を担当された。昭和51年5月より同55年3月まで化学研究所附属新無機合成開発施設長を併任、同57年4月改組により新機能材料研究部門第一研

究部門を担当、同61年停年により退官され、名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和55年4月より同57年3月まで化学研究所長及び評議員を務め、大学の管理、運営に多大の貢献をされた。本学退官後は昭和61年4月より岡山理科大学教授に就任された。

先生は無機固体化学の分野において数多くの顕著な業績を挙げられた。その主な内容は気相、液相、固相からの無機固体結晶の合成反応と物性に関するもので、特に水溶液からの酸化鉄の研究では複雑な反応過程を長年に亘る系統的な研究によって見事に解明され、世界的に高く評価される業績を挙げられた。先生はその成果を高純度酸化鉄粉、磁気記録用酸化鉄粉、高純度湿式フェライト粉等の製造や、酸化鉄顔料の無公害製造へと発展させ、工業化に対しても多大の貢献をされた。この中で忘れてならないのは、先生が開発された湿式フェライト粉の製造法が重金属廃液処理に応用

され、本学をはじめ我が国及び諸外国の大学、研究機関において実施され、研究、教育、環境保全に大きな役割を果たしていることである。

これらの業績により昭和37年度社団法人粉体粉末冶金協会研究功績賞をはじめ、同49年度環境調査センター第一回環境賞、同54年度日本化学会化学技術賞、同58年度京都新聞文化賞、同59年度加藤科学振興会加藤記念賞、など数々の賞を授与された。

先生は、日本化学会副会長、同近畿支部長、また粉体粉末冶金協会では長く理事を務められ、副会長、会長を歴任され、学会の運営と発展に尽力された。これら一連の業績により昭和62年11月紫綬褒章を、また平成5年10月28日勲二等瑞宝章を受けられた。

ここに謹んで、哀悼の意を表します。

(化学研究所)

「白馬山の家」の冬季開設

本学の学生及び教職員の厚生施設として、例年夏季及び冬季に開設されている「白馬山の家」を、今冬も下記により開設します。

この山の家は、中部山岳国立公園白馬山麓^{つがいけ}の杓池高原にあり、雄大な北アルプスの峰々に囲まれ、積雪量も多く、雪質の良さとともにスキーには絶好の条件を備えており、初心者向きから上級者向きまで各種のゲレンデがあります。

なお、建物は山小屋風の木造地上2階、地下1階建で、間取りは1階が食堂兼談話室、2階が寝室、地階が浴室、乾燥室等からなっています。

記

1. 名 称 京都大学^{はくば}白馬山の家 (電話 0261-83-2405)
2. 所 在 地 長野県北安曇郡^{あづか}小谷村^{おたり}大字^{ちくに}千国字柳久保乙869の2
(交通機関)

JR大糸線「白馬大池駅」下車、松本電鉄バス「親^{おや}の原^{はら}」下車、徒歩約20分

3. 開設期間 12月20日(月)～1月10日(月)並びに2月20日(日)～4月10日(日)
4. 収容人員 26名
5. 所要経費 1人1泊 使用料120円、ほかに食費、暖房費等実費
6. 申し込み及び利用に関する詳細は、体育会事務室(西部構内総合体育館内、電話学内2574)に照会してください。
7. そ の 他 当施設には、駐車場がないため、自動車での利用は避けて下さい。

(学生部)

